

北谷町の戦争体験

未来に伝える 平和の想い

※北谷町ホームページ
平和祈念祭のサイトから
「戦争体験者インタビュー」
で映像が確認できます。
各QRコードからチェック!



「学童疎開船（暁空丸ぎょうくうまる） で熊本に避難生活」

桑江出身 仲地 信夫氏（当時10歳）



1944年、私達兄弟は学童疎開をすることになった。私達が乗った船は、対馬丸と同一船団の一つ学童疎開船暁空丸（ぎょうくうまる）で、熊本県の日奈久町、現在の八代市日奈久町に疎開した。10歳の私にとっては、船に乗って本土（やまと）に行けるといった修学旅行気分だったが、疎開先での生活は、地元の児童との交流もほとんどない、ひもじくて、寒く、寂しい生活だった。何も言えない社会、軍事国家は恐ろしい。戦争を経験した者として、戦争のない平和な世の中を願っている。



「幸せな幼少期から 艦砲射撃を受け北部へ疎開」

北谷出身 座喜味 文子氏（当時14歳）



戦前の北谷は、県下3大美田の一つで、北谷ターブックファーと呼ばれ、田園風景が広がる農村地帯として知られていた。北谷グスクの近くに北谷トンネルがありよくトンネルの中で遊んでいた。1945年3月26日、墓に隠れているとすぐ近くに艦砲弾が撃ち込まれ、ものすごい衝撃で体中が震え治まらなかったことを今でも覚えている。私達家族は、父親が東京にいたため、祖母、母、私の3名で親戚のいる久志村天仁屋へ疎開となった。その途中、北谷の海には、軍艦がビッシリ並び真っ黒に埋め尽くされていた。二度と戦争を起こしてはいけない。戦争を体験してほしくない。そのためには、若い世代が政治や色々なことに関心を持ち続けることが大切だ。

「上陸空襲から避難と収容所生活」

下勢頭出身 喜友名 朝徳氏（当時10歳）



1945年、3月23日頃からは空襲が激しくなり、その空襲を「上陸空襲」と言っていた。私達家族は、母親が出産間近のため北部に避難することができず、壕を探しながらの避難となり、妹が壕の中で産まれた。壕が米兵に見つかり赤ちゃんを抱き上げられた時は、誰もがこれまでだと思っただが、米兵は優しく、日本軍を警戒しながら北中城村の鳥袋収容所まで移動した。鳥袋収容所では、1つの民家で63名が生活していた。戦争をするのも人間。平和をつくるのも人間。軍国主義の社会では何も発言することができない。二度と戦争を起こさないために若い世代が政治など色々なことに関心を持ち続けることが大切だ。

「防空壕を転々としながら羽地疎開」

砂辺出身 與儀 正仁氏（当時13歳）



私は親戚と一緒に3月27日、嘉手納から金武、羽地へと避難を始めた。途中、艦砲弾や照明弾の攻撃が凄まじく、艦砲にやられた人は無残で、恐ろしい光景だった。羽地までの道のりは非常に厳しく、何とか辿り着いた後に配給されたおにぎりの味は今でも忘れられない。北部は南部に比べて戦争は激しくなかったと言われているが、北部も激しかったと思う。あの時の事を今でも思い出すことがある。戦争は恐ろしい、残酷だ。人生は一度きり。命を大切に政治や色々なことに興味を持ち自分事としてらえ沖縄戦を次の世代にしっかり引き継ぎ、命のバトンを次の世代へ引き継いでほしい。

「北谷から見た十空襲と 運命を分けた避難」

北前出身 新田 宗信氏（当時10歳）



1944年10月10日（十空襲）の早朝、星条旗が付いた零戦を目撃した。夕方になると那覇が真赤に燃え、逃げて来る人が沢山いた。子どもながらによいよ戦争が始まると感じた。私達家族は、親戚と一緒に島尻に逃げるため荷馬車を引き、普天間へと向かったが、途中で橋が爆破され、島尻行きを断念した。今思うと、あれが、私達家族が生き残れた運命の分かれ道だったと感じる。（島尻に向かった親戚は、一家全滅となった。）戦争は二度と起こしてはならない。私達のような遺族をつくらない。戦争の記憶を風化させてはいけない。そのために、沖縄戦の実相を知り、戦跡等を巡り、沖縄で何が起こったかを学んで欲しい。

「サイパン島で向かえた戦争」

上勢頭出身 高宮城 清氏（当時13歳）



1939年父に呼び寄せられ、サイパン島へ渡るも、1944年6月13日から水平線に無数の戦艦が現れ、艦砲射撃が始まった。家族7名で避難している途中、艦砲の集中射撃を受け、毛布を被って身を潜めるも弟一人と妹二人が息絶え、破片が刺さった父親も翌日には息を引き取った。その後、母と弟と三人で避難するも離れ離れになってしまい、合流した時には弟も栄養失調で亡くなっていた。7名家族が母と二人だけになった。本当に戦争は残酷だ。自分にしっかりと考えた考えがない付和雷同にならないように一人一人が自分の意見をしっかりと持ち、考えることができる人になってほしい。